健康総合科学科　選択科目「医療人類学」
2013 年 4 月 26 日
「概念を提示してケースを読み解く」
サイクル１：信念（brief）　　主担当：　梅崎昌裕

１．分析概念 ”信念（belief）” の定義

<u>学習のポイント</u>

Belief ー何かのできごとに対処する際に参照されるような基本的な「考え方」。

Belief はそれぞれの個人が他者とのかかわりのなかで身につけるものであり、 通常、自らがアイデンティティをもつ社会の他の構成員と共有されている。

Belief に優劣はない。正誤もない。

「それぞれの Practice の背後にある Belief は何か？」と考える。

同じ医療技術の Practice が国（文化）によって異なることを、Belief の違いによって説明できないか。

医療人類学では、信念（belief）という言葉を、ふだんの私たちの使いかたとは異なった意味で定義します。日常的な会話でつかう「信念」には、自分の信じる道というようなニュアンスをふくみます。それぞれの個人は、その人なりの価値観をもっており、それを信念と呼ぶことが多いように思います。一方、医療人類学でつかわれる場合には、実践（practice）の場面で参照されるような基本的な「考え方」を意味します。信念は、それぞれの個人が他者とのかかわりのなかで身につけるものであり、したがって、自らがアイデンティティをもつ社会の他の構成員と共有されています。

信念は、現代医学の提供する新しい技術をどのように受け入れかという practice に大きく影響するものです。話を簡単にするために、二つの対照的な信念を想定してみましょう。ひとつめは、「命は自分のもの」（A）、もうひとつは、「命は自分だけのものではない」（B）という 信念です。（A）の信念を共有する社会では、延命治療を受け入れるかどうかは個人が決めるべきことであり、延命治療を受け入れることで延命以外の回復の見込めない個人への導入は限定的になると予想されます。一方、（B）の信念を共有する社会では、延命治療を受け入れるかどうかには、本人の家族をふくむ社会のメンバーの意向が影響するために、「生きてさえいてくれれば」という希望をもつ家族の意向を反映して、必ずしも延命以外の回復の見込めない個人への延命治療がひろくおこなわれることになるでしょう。

このような信念は、延命治療を提供する医療関係者の側にもあり、（B）の信念をもつ社会に生きる医師は、延命治療の適用にあたり患者の希望だけでなく家族などの希望も考慮す

ることでしょう。日本の医療現場では、他の国に比較して延命治療の件数がおおいのかすくないのか、その日本と他の国の違いは、信念を定義することで理解可能となるのか、考えてみましょう。

２．対照的な信念の例

あ．命は私のものだ。命は私だけのものではない。
い．命は救えるものだ。命は救えるものではない。
う．親からもらった体に手を加えるべきではない。これは自分の体だ。
え．年齢や性別によって命の価値は違う。年齢や性別によって命の価値は変わらない。
お．他には？

３．＜ビデオ教材＞　ETV 特集　「食べなくても生きられる～胃ろうの功と罪～」

「胃ろう」にかかわるさまざまな”practices”を分析概念”belief”を使って読み解こう＞

４．次回への課題
・3 人 1 組で 4 グループ。
・「おもしろい」発表。みんなを唸らせて。
・授業をふまえて、何を調べるか、何を検討するかをグループごとに話し合う。
・よそのグループより優れたプレゼンテーションをする戦略を意識して。
・みんなで採点・集計。客観的な評価を知る。戦略の練り直し。

・ビデオ教材が作成されてから今日にかけての「胃ろう」をめぐる状況の変化？
・自分はいやだけど、家族にはお願いしたい？